

注

- 1) 具体的には、「正しい発音で話すのが重要だ」「大人より子供の方が外国語を学ぶのが簡単だ」「日本語学習で最も重要なことは韓国語から翻訳できることだ」という確信を持つ人には悪い成績が、逆に、そうした確信を持たない人にはよい成績が予測されると述べている。さらに、「日本語を毎日1時間ずつ勉強すれば、1年以内に上手にはなせるようになる」、「外国語学習で最も重要なのは文法学習だ」という確信をもっている場合にはよい成績が、逆にそれらを持たない場合は悪い成績が予測されると述べている。本学の1級合格者外国人学生の場合には上の結果とはまったく反対の結果であった。
- 2) BALLIの項目13は短期大学の生活において具体性に欠けるのではずした。
- 3) 性別によるビリーフスの違いも報告されている (Bacon 1992) が、JSLの人数が少ないことから今回は性別の分析はおこなわない。
- 4) この項目は日本語能力向上のための学習ストラテジーとも解釈できるが、ここでは Horwits に従い動機と解釈する。

参考文献

- Horwits, E. K. (1988) The Beliefs about Language Learning of Beginning University Foreign Language Students *The Modern Language Journal* 72. 3, pp. 283-294
- Susan M. C. Bacon (1992) Sex Differences in Self-Reported Beliefs About Foreign-Language Learning and Authentic Oral and Written Input Language Learning 42. 4, pp. 471-495
- 渡辺晴世 (1990) 「学習者ビリーフスとラーニングストラテジー—学習者からの言語学習に関する情報獲得の試み—」『日本語教育論集』7 国立国語教育研究所日本語教育センター
- 橋本洋二 (1993) 「言語学習についての BELIEFS 把握のための試み—BALLI を用いて—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8号 pp. 215-241
- J. V. ネウストプニー (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 石橋玲子, 大塚淳子, 鈴木紀子, 八若寿美子 (1996) 「中級日本語学習者の自律的学習に向けての意識化の試み」『言語文化と日本語教育』11号 お茶の水女子大学日本語文化学会研究会 pp. 62-73
- Yoshiko Mori (1999) Epistemological Beliefs and Language Learning Beliefs: What Do Language Learners Believe About Their Learning? *Language Learning* 49. 3, pp. 377-415
- 板井美佐 (2000) 「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について—香港4大学のアンケート調査から—」『日本語教育』104号 pp. 69-78
- 岡崎 眸・堀和佳子 (2000) 「言語学習についての確信—韓国人日本語学習者の場合—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第53巻 pp. 185-201

で取り入れてきたコミュニカティブ・アプローチについては、JSLの言語学習の性質に関するビリーフスで、言語学習は文法規則を覚えることではないと考える傾向があり、授業中の発言、質問に対するビリーフスも肯定的であることから、引き続き取り入れていく。

《教室活動》

上述の教授法を使って本学科に必要な言語能力および日本の歴史、文化、文学に関する基礎的知識の獲得と定着をはかるため、1週間3コマの通年の授業を「テーマの導入」→「テーマに関する読み物の読解」→「テーマに関する作文」のように同じテーマで連携しておこなう。3コマの授業は便宜上技能別になっているが、各授業は4技能をあまり区分せずに統合的に指導をおこなう。聴解の授業に関してはテーマ授業から離れ、現代社会に関するテレビ番組を中心に内容の聞き取りと社会的知識の獲得を目指す授業にする。

《教材》

1週間1テーマで進められるよう、日本史を1年間の授業回数に相当する25回で教えられる教科書を作成する。各課には本文のほかに、内容理解と発話を促すために写真資料を多く付け、復習のために語彙リストを付ける。語彙リストには日本語能力1級の語彙に☆印をつけ、大学の授業理解のために必修語彙であることを示す。また、オーディオリンガルのな反復練習を有効と考える学習者のためにJSLが自宅で復習できるよう、教科書の内容を吹き込んだテープを作成する。各課に関するビデオも作成し、ビジュアルな教材を使って理解と記憶の定着をはかる。

現在、9月にまとめた試案を実行にうつし、作成した教材を使って授業をおこなっている。日本語と日本文化を学ぶために本学へ入学し、入学後日本語学習に対してやや楽観的な方へ傾いて来た外国人学生の期待を今後裏切らないようにするには、このカリキュラムの学習効果についての調査だけでなく、JSLのビリーフスと教師のビリーフスのずれの有無に関する調査もおこない、学習を阻害していると思われる点をよりきめ細かくとらえて改善をはかっていかなければならないと考えている。

本報告のビリーフス調査は、平成12年度日本私立学校振興・共済事業団の『特色ある教育研究の推進』の補助金を受けておこなったものである。ビリーフス調査の項目作成にあたっては非常勤講師菊池民子氏、カリキュラム・デザインの作成にあたっては本学助教授染谷裕子氏、非常勤講師菊池民子氏のご指導、ご助力をいただいた。ここに深く御礼申し上げる次第である。

ためには日常生活が目標言語で満たされている環境に身を置くことが効果的であると考え、そのような言語環境を期待して本学に入学したと考えられる。入学時のビリーフスは、言語学習は成人にとって大変困難であり、その上日本語は難しく、習得は難しい、そして、自分には日本語学習に自信がない、というものであった。しかし、JSLはこのようなビリーフスを持ちつつも臆病になるということではなく、日本人学生らとコミュニケーションの機会を作ろうとし、また、授業でも教師からの質問を期待する面もあり、積極的な姿勢がうかがえる。教授法に関しては、JSLは日本語学校の教授法の影響を受けて、言語学習というものはオーディオリンガルの反復による学習が大切であるという考えを持っているが、反面文法学習の必要はそれほど感じてはおらず、翻訳による学習を否定する傾向がみられる。ちなみに岡崎・堀(2000)は、韓国人学習者JFLは「文法の学習」を否定する傾向があることを、板井(2000)は、香港の中国人学習者JFLは「文法の学習」を重要視していると報告しているが、本学のJSLは両学習者ともに否定傾向である。

ビリーフスの変化については、1項目に有意な変化、3項目に有意傾向の変化が検出された。有意な変化が見られたのは、「日本人と一緒に授業を受けていけば、聴解力が向上すると思う」（否定傾向へ）であり、有意傾向が見られたのは、「言語には学びやすい言語とそうでない言語がある」（否定傾向へ）、「誰でも外国語が話せるようになる」（肯定傾向へ）、「日本人と一緒に授業を受けていけば、読解力が向上すると思う。」（否定傾向へ）である。この結果から、JSLの意識は、やや楽観的なビリーフスに変化しているものの、日本語の授業に身を置いていてもそれがすぐに専門の授業の理解促進にはつながらないと感じていることがあきらかになった。

5.2 今後のカリキュラム改善にあたって

以上のJSLのビリーフスの総体をもとに基づきのようなカリキュラム・デザインの試案を作成した。

《教授法について》

JSLは、入学時には日本語の授業を聞けば専門科目の授業がわかるようになると考えていたが、読解、作文、聴解、日本事情と別個にたてられたカリキュラムでは専門科目の授業理解の促進にならないという意識に変化した。このことから、改善案では、日本語の授業を本学科の授業内容に接近させ、日本史や日本文学に関する知識を日本語でインプットするダイレクト・メソッドによるイマーシブプログラムに切り替える。また、4月以来日本語の授業

表 8

母語別 項目	クラス全体		B1・B2	韓国語母語話者		中国語母語話者		X 語母語話者		Y 語母語話者	
	B1	B2	有意差	B1	B2	B1	B2	B1	B2	B1	B2
※46	1.6 (0.5)	1.9 (0.8)	ns	1.6 (0.5)	2.0 (0.9)	1.6 (0.5)	2.0 (0.5)	1	1	2	1
※ 8	2.3 (0.9)	2.6 (0.8)	ns	2.5 (0.9)	2.4 (0.7)	2.6 (0.9)	3.1 (0.6)	1	2	1	1
※ 4	2.9 (0.9)	2.6 (1.0)	ns	3.3 (1.0)	2.8 (1.2)	2.6 (0.7)	2.5 (1.1)	2	2	4	2
※13	2.9 (1.0)	2.9 (1.1)	ns	3.4 (1.1)	3.0 (1.2)	2.8 (0.9)	2.8 (0.9)	2	5	2	2
※12	3.6 (1.0)	3.6 (1.0)	ns	3.6 (1.1)	3.1 (1.0)	3.5 (0.8)	3.0 (1.1)	5	5	3	2
※49	3.8 (0.7)	3.4 (1.1)	ns	4.0 (0.5)	3.3 (1.0)	3.5 (0.9)	3.5 (1.2)	4	5	4	3

希望しており、授業の受け方が受け身ではないことが分かる。韓国語母語話者と中国語母語話者間の評定結果にいずれの項目においても有意な差は検出されなかった。

変化については、クラス全体での有意な差は検出されなかったが、項目 49 で韓国語母語話者が中国語母語話者より有意傾向で否定から中間へ移行している。また、7月時の項目 8 では中国語母語話者は韓国語母語話者より有意差で否定傾向を示している。

以上のことから教師への依存度、要求に関するビリーフスに大きな変化は見られず、自立的な面が保持されている。

5. まとめとカリキュラム・デザインの試案

5.1 まとめ

4月入学時のJSLのビリーフスと3カ月後の7月時のビリーフスの変化についてみてきたが、韓国語母語話者と中国語母語話者間に入学時におけるビリーフスに、いずれの項目においても有意差はなく、有意傾向も中国語母語話者に「私の国の人日本語が話せることを重要だと思っている(34)」「私は日本語が勉強したい。そうすればもっと日本人をよく知ることができると思う(39)」「黒板に書かれた文字や図は全部写さなければならないと思う(55)」で肯定傾向がみられたことと、韓国語母語話者に「私は日本語が上手に話せるようになると思う(10)」で肯定傾向がみられたのみであった。したがって、この調査結果のまとめではクラス全体の平均値から考察を試みる。

JSLの入学時のビリーフスをまとめると次のように言えるであろう。JSLは日本語学習に対して自律的かつ明確な動機を持ち、その動機を具体化する

で強く感じている。

変化については項目9で有意な差がみられた。4月時では「授業の内容が分からないときはその場で質問したほうが良いと思」っていたが、7月になって強い肯定からやや肯定に移行している。その他の項目では有意な変化はみられなかった。クラス全体の変化ではないが、項目6では変化後に韓国語母語話者と中国語母語話者間に有意な差が検出され、7月時では中国語母語話者の方が韓国語母語話者より強い否定を示している。

以上のことから、入学後授業中に教師にその場で質問することが難しいという経験を通して「授業の内容が分からないときはその場で質問したほうが良い」というビリーフスにやや変化がおきていると考えられるが、授業後に質問する戦略よりも評定が肯定傾向であることから、大きな変化がおきているとは考えられない。

4.7 教師への要求、依存度

この領域もあらたに加えたものであり、教師に対するビリーフスをとらえるための質問6項目からなる。

- ※ 4. 教師が日本語の授業の主導権を握るべきである。
- ※ 8. 教師は、学生がどのように勉強したら効果的に日本語を学べるかということ
を学生より知っている。
- ※12. 日本語の授業の方法や計画について学生同士が話し合っ
て決めるのは時間のむだである。
- ※13. 日本語の学習方法についての教師のアドバイスが気に入らなくても教師の意見に従う。
- ※46. 日本人と一緒に授業の時、質問に対する自分の答えがまちがっていたらはっきり訂正してほしい。
- ※49. 日本人と一緒に授業の時、授業内容を理解することに集中したいので、授業中は質問してほしくない。

表8からわかることは、4月時のJSLは教師による授業中の訂正を期待しているが、教師が中心となった授業展開をそれほど期待しているわけではなく、教師が学習方法をよく知っているという全面的な寄りかかりもなく、「日本語の授業の方法や計画について学生同士が話し合っ
て決めるのは時間のむだで」はないと考えており、自立的な面もうかがえる。また、授業中の質問を

が在籍した日本語学校とはまったくことなり、授業の内容そのものが難しいというだけでなく、学習していない語彙や表現が溢れる教室環境に身をおく状態になることが予測され、このような理解困難な場面に遭遇した場合、どのようなストラテジーをとることが有効であると考えているかについての情報を得ておく必要があると考えたからである。

- ※ 3. 授業を聞くことより、黒板の文字を写すことのほうが大切だと思う。
- ※ 6. 授業の内容が分からないときは教室で質問するより、自分で調べた方が良くと思う。
- ※ 9. 授業の内容が分からないときはその場で質問したほうが良いと思う。
- ※17. 授業の内容が分からないときは教室で質問するより、担当の教師に後で聞いたほうが良いと思う。
- ※22. 授業の内容が分からないときは教室で質問するより、日本人の学生に聞いたほうが良いと思う。
- ※55. 黒板に書かれた文字や図は全部写さなければならないと思う。
- ※56. 授業の内容が分からないときは教室で質問するより、留学生の友人に聞いたほうが良いと思う。

表7から、4月時のJSLクラス全体は「授業の内容が分からないときはその場で質問したほうが良い」と考え、自分で調べたり教師や留学生あるいは日本人の学生に質問することによって疑問点を明らかにするストラテジーを有効とは考えていないことがわかった。韓国語母語話者と中国語母語話者では、項目55で中国語母語話者の方が板書を書き写すことの必要を有意傾向

表7

母語別 項目	クラス全体		B1・B2	韓国語母語話者		中国語母語話者		X 語母語話者		Y 語母語話者	
	B1	B2	有意差	B1	B2	B1	B2	B1	B2	B1	B2
※ 9	1.7 (0.5)	2.2 (0.7)	$p < .05^*$	1.8 (0.5)	2.3 (0.7)	1.8 (0.5)	2.1 (0.8)	2	2	1	2
※ 3	2.6 (0.9)	2.9 (1.3)	ns	3.0 (0.9)	3.1 (1.2)	2.4 (0.7)	2.5 (1.2)	2	5	1	2
※55	3.1 (1.1)	2.6 (0.9)	ns	3.6 (1.1)	2.8 (0.9)	2.6 (0.9)	2.6 (0.9)	4	1	2	3
※17	3.3 (0.9)	3.0 (1.1)	ns	3.0 (0.7)	3.3 (0.9)	3.3 (0.9)	3.0 (1.3)	4	2	5	2
※22	3.3 (0.8)	3.3 (0.8)	ns	3.1 (0.9)	3.4 (0.9)	3.5 (0.8)	3.4 (0.5)	4	4	2	2
※56	3.3 (0.8)	3.2 (1.0)	ns	3.4 (0.7)	3.1 (1.0)	3.3 (1.0)	3.1 (0.8)	4	5	3	2
※ 6	3.6 (1.1)	3.3 (1.0)	ns	3.5 (1.3)	2.9 (1.1)	3.6 (1.1)	4.0 (0.5)	4	2	4	3

表 6

母語別 項目	クラス全体		B1・B2	韓国語母語話者		中国語母語話者		X 語母語話者		Y 語母語話者	
	B1	B2	有意差	B1	B2	B1	B2	B1	B2	B1	B2
31	1.8 (0.7)	1.9 (1.9)	ns	1.9 (1.0)	2.0 (0.9)	1.6 (0.5)	1.9 (0.4)	2	2	2	1
41	1.9 (0.6)	2.2 (0.9)	ns	2.1 (0.6)	2.3 (0.9)	1.9 (0.6)	2.4 (0.7)	1	1	2	1
15	1.4 (0.5)	1.6 (0.5)	ns	1.4 (0.5)	1.6 (0.5)	1.5 (0.5)	1.6 (0.5)	1	1	1	1
36	2.2 (1.0)	2.1 (1.0)	ns	2.4 (1.2)	2.0 (0.9)	2.3 (0.9)	2.4 (1.0)	1	1	2	2
25	2.4 (1.0)	2.8 (1.2)	ns	2.9 (1.1)	3.1 (1.2)	2.3 (1.2)	2.6 (0.9)	1	4	1	1
※27	2.4 (0.9)	2.7 (1.1)	ns	2.5 (0.9)	3.3 (1.2)	2.5 (0.9)	2.1 (1.0)	2	2	2	3
26	2.9 (1.0)	2.6 (0.8)	ns	2.6 (1.2)	2.6 (0.7)	3.1 (1.0)	2.5 (0.8)	4	2	2	4
※33	2.9 (1.1)	2.8 (1.1)	ns	3.3 (1.0)	2.4 (1.2)	3.0 (0.9)	3.4 (0.9)	1	2	2	2
35	3.6 (1.2)	3.8 (0.9)	ns	3.4 (1.0)	3.5 (1.2)	4.4 (0.5)	4.1 (0.4)	2	4	1	4
19	3.9 (1.3)	4.2 (0.9)	ns	4.5 (0.8)	4.0 (0.8)	3.4 (1.7)	4.3 (1.0)	5	5	2	5

語彙や表現を記憶することが有効であると考えるビリーフスがあると思われる。また、項目 26 が中間的であることから、コミュニケーションの際のわからない言葉を推測することを不安と感じ、理解できる語彙表現を増やしたいという姿勢が読み取れる。しかし、項目 19, 33, 35 が否定傾向を示しており、目標の日本語のレベルに達していなくても、日本人とのコミュニケーションに対して臆病になるということではなく、積極的に機会を作ろうとする姿勢もうかがえる。いずれの項目でも韓国語母語話者と中国語母語話者にも有意な差はなかった。

変化については、クラス全体および韓国語母語話者と中国語母語話者語には有意な変化はみられない。

以上のことから、この領域に関してのビリーフスは 4 月以降も揺るぎないものと思われる。

4.6 授業理解のためのストラテジー

この領域は短大での授業理解のストラテジーに関するビリーフスをあきらかにするためにあらたに付け加えた領域で、7 項目からなる。この項目は次のような理由で付け加えた。日本人は一般的に授業中分からない箇所があってもすぐその場で質問をするような行為は控え、授業後に質問に来る、あるいは分からないところは友達に聞くなど、教師との関係においては消極的な傾向がみられる。これに対して、JSL は積極的に発言したり質問したりする傾向がみられる。しかし、本学の専門科目等の授業の学習環境はこれまで JSL

解の促進に役立っていないと感じは始めている。他の項目で両母語話者に有意な変化はみられなかった。

以上のことから、JSL は言語学習の性質に関して日本という目標言語の環境で学習することが学習効果をあげるというビリーフスを固く保持してはいるが、大学の授業を受けていれば日本語能力が自然についてくるというビリーフスには修正傾向がみられる。

4.5 学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー

この領域は、コミュニケーションの上達のために具体的にどのような方法で学習すればよいかということと、日本語および他の授業でどのような学習行動をとればよいかという、JSL の発話行為のストラテジーに関するビリーフスの実態をとらえることを目的としている質問 10 項目からなる。

《学習ストラテジー》

- 31. 反復練習をたくさんすることが重要だ。
- 41. カセットテープで練習することが重要だ。

《コミュニケーション・ストラテジー》

- 15. 正しい発音で日本語を話すことが大切だ。
- 19. 正しく話せるようになるまでは日本語を話すべきではない。
- 25. 日本語を話しているひとがいたら、日本語を実際に使う練習になるから、その人のところへ行こうと思う。
- 26. 日本語でわからない言葉があったら推測してもよい。
- ※27. 日本語（読解、作文、聴解、日本事情）の授業で発言するときは緊張しないと思う。
- ※33. 日本人と一緒に授業で発言するときは緊張すると思う。
- 35. 私は日本人と日本語を話すとき臆病になる。
- 36. 日本語学習の初期の段階で誤りが訂正されないと、その誤りは後で訂正するのが難しくなる。

表 6 が示すように、4 月時点で JSL はコミュニケーションの際に「正しい発音で日本語を話すことが大切だ」と強く考えている。学習初期における発音矯正の重要性を感じていることも、正しい発音で話したいという気持ちの現れであろう。学習ストラテジーの項目 31, 41 が強い肯定を示している背景には「正しい発音で日本語を話すことが大切だ」というビリーフスと、日本語学校で身につけたオーディオリンガルの学習法でたくさんテープを聞いて

表 5

母語別 項目	クラス全体		B1・B2	韓国語母語話者		中国語母語話者		X 語母語話者		Y 語母語話者	
	B1	B2	有意差	B1	B2	B1	B2	B1	B2	B1	B2
24	1.6 (0.6)	1.6 (0.8)	ns	1.9 (0.6)	2.1 (1.0)	1.3 (0.5)	1.3 (0.5)	1	1	2	1
※11	1.8 (0.5)	2.3 (0.8)	$p < .05^*$	2.0 (0.5)	2.4 (0.7)	1.9 (0.4)	2.3 (0.9)	1	2	1	2
※20	1.8 (0.4)	2.3 (1.1)	ns	1.9 (0.4)	2.8 (1.2)	1.8 (0.5)	2.0 (0.9)	2	2	2	1
※38	1.8 (0.5)	1.9 (0.4)	ns	2.0 (0.5)	1.9 (0.4)	1.8 (0.5)	2.1 (0.4)	1	1	2	1
18	2.0 (0.7)	2.1 (0.7)	ns	1.9 (0.4)	2.0 (0.5)	2.0 (0.9)	2.0 (0.5)	3	4	2	1
30	2.1 (0.7)	2.2 (0.9)	ns	2.5 (0.8)	2.3 (0.9)	1.8 (0.5)	2.5 (0.8)	2	1	1	1
※16	2.1 (0.8)	2.7 (1.1)	$p < .10^+$	2.5 (0.8)	2.8 (1.0)	2.0 (0.5)	2.0 (0.5)	1	4	1	1
※43	2.1 (0.8)	2.2 (0.8)	ns	2.3 (1.0)	2.5 (0.9)	2.1 (0.6)	2.1 (0.4)	1	1	2	1
※51	2.3 (0.8)	2.1 (0.7)	ns	2.4 (0.5)	2.3 (0.7)	2.0 (0.8)	2.3 (0.5)	4	1	2	1
42	2.4 (0.9)	2.8 (1.2)	ns	2.1 (0.6)	3.1 (1.2)	2.9 (1.0)	2.5 (0.9)	2	1	2	4
※54	2.7 (0.9)	3.1 (1.0)	ns	2.9 (0.8)	3.4 (0.9)	2.8 (1.0)	2.8 (0.9)	2	5	2	2
37	2.7 (1.1)	2.9 (1.1)	ns	3.5 (0.8)	3.3 (0.9)	2.4 (0.9)	3.0 (1.0)	1	2	1	1
40	3.0 (1.1)	2.7 (1.1)	ns	2.9 (1.1)	3.1 (1.2)	3.0 (0.9)	2.5 (0.8)	5	4	2	1
53	3.2 (1.0)	3.0 (1.0)	ns	3.6 (0.7)	3.1 (1.0)	2.9 (1.1)	2.9 (1.0)	2	4	3	2
44	3.2 (1.2)	3.3 (1.1)	ns	3.3 (0.9)	3.1 (1.0)	3.1 (1.4)	3.4 (1.1)	5	5	2	2

表 5 から、4 月時の JSL は言語学習は目標言語が使われている国でおこなうことが習得への近道であり、アルバイトをしながら日本で生活し、日本語の環境に身をおき、日本の文化を知ることがベストであるという考えをもっていることがわかる。また、言語学習というものは、新しい語彙を増やすことであり、翻訳や文法知識の獲得ではないと感じていると読み取れる。また、日本語を上達させるには、大学生活においても日本語だけを使って送ること、授業中の教師の質問も効果があると考えられる傾向がみられる。4 技能に関しては読む・書く・話すを難しいものにとらえている。この領域では韓国語母語話者と中国語母語話者間に有意な差はみられなかった。

変化については、クラス全体で項目 11 に否定方向への有意な変化がみられ、項目 16 でも有意傾向で否定へ変化がみられた。この二つの項目の変化から、入学当時日本語の環境に身をおくことがベストであり、日本人と一緒に授業を受けていけば日本語能力の向上がはかれるという期待は、実際に授業を受けていく過程で薄れていったと思われる。韓国語母語話者と中国語母語話者間では、項目 30 で中国語母語話者に否定への有意な変化がみられ、項目 38 に有意傾向で否定への変化がみられた。項目 20 と 42 では韓国語母語話者に有意傾向で変化がみられ、項目 11, 16 同様日本語の授業が専門の授業理

話者に肯定への移行に有意な変化がみられ、4月時より「外国語を学ぶ特別な能力を持っている人がいる」というビリーフスへ変化している。

以上のことから、言語学習に関する適性については、「大人より子供のほうが外国語を学ぶのは簡単だ」というビリーフスが揺るぎのないものとしてあるが、7月時点では「誰でも外国語がはなせるようになる」というビリーフスも形成され、子供の方が習得が速いことは自明のことであるが、成人であるJSLもいつかは日本語が話せるようになるという楽観的ビリーフスへの変化の兆しがみえはじめている。

4.4 言語学習の性質

この領域は目標言語の学習の一般的性質に関するだけでなく、本学における日本語の授業や日本人学生と一緒にの授業を目標言語の学習との関係でどのように位置付けているかを明らかにするための項目である。15項目の質問内容は次のとおりである。なお、※は本稿であらたに加えた項目を示す。

- ※11. 日本人と一緒にの授業を受けていれば、聴解力が向上すると思う。
- ※16. 日本人と一緒にの授業を受けていれば、読解力が向上すると思う。
- 18. 日本語を話すためには日本文化に関する知識が必要だ。
- ※20. 日本語(読解, 作文, 聴解, 日本事情)の授業に出席して勉強すれば、専門の授業の内容がだんだんわかるようになると思う。
- 24. 日本で日本語を学ぶのが一番よい。
- 30. 外国語を学ぶということは主として新しい語彙をたくさん学ぶことだ。
- 37. 外国語を学ぶということは主として文法規則をたくさん学ぶことだ。
- ※38. アルバイトは経済的な理由だけでなく、日本語の勉強のためにもいいと思う。
- 40. 外国語は聞いて理解するより話すほうが簡単だ。
- 42. 外国語を学ぶことは他の科目を学ぶのとはちがう。
- ※43. 大学では、同じ母語の留学生同士も日本語だけで話した方が日本語の勉強のためにいいと思う。
- 44. 日本語を学ぶのに最も重要なのは、自分の国の言葉から翻訳することだ。
- ※51. 日本人と一緒にの授業のとき、教師に質問されるほうが日本語の勉強になると思う。
- 53. 日本語は話したり聞いたりするより読んだり書いたりするほうが簡単だ。
- ※54. 日本人と一緒にの授業を受けていれば、作文力が向上すると思う。

表 4

母語別 項目	クラス全体		B1・B2	韓国語母語話者		中国語母語話者		X 母語話者		Y 母語話者	
	B1	B2	有意差	B1	B2	B1	B2	B1	B2	B1	B2
1	1.7 (0.9)	1.6 (0.6)	ns	1.6 (1.0)	1.5 (0.5)	2.0 (0.9)	1.9 (0.6)	1	1	2	1
52	2.5 (1.0)	1.9 (0.7)	$p < .10^+$	2.6 (1.2)	2.1 (0.8)	2.1 (0.6)	2.0 (0.5)	5	1	2	1
21	2.5 (1.0)	2.4 (0.9)	ns	2.1 (1.1)	2.1 (0.8)	2.9 (0.9)	2.8 (0.7)	4	4	2	1
2	2.7 (1.3)	2.2 (0.9)	ns	2.6 (1.5)	2.6 (1.2)	3.0 (1.2)	2.0 (0)	2	1	2	1
47	2.7 (1.0)	2.7 (1.0)	ns	3.0 (0.9)	2.6 (1.2)	2.8 (1.0)	2.8 (0.7)	2	4	1	1
32	2.7 (1.3)	2.9 (1.2)	ns	2.6 (1.6)	2.4 (1.2)	2.8 (1.0)	3.3 (1.0)	2	5	5	3
14	3.1 (0.8)	2.8 (1.0)	ns	2.9 (0.6)	3.0 (1.2)	3.3 (0.7)	3.0 (0.8)	5	4	2	2
23	3.4 (1.0)	3.3 (1.1)	ns	3.4 (1.2)	2.9 (1.1)	3.4 (0.7)	3.4 (1.1)	5	4	2	5
29	3.5 (1.0)	3.2 (1.1)	ns	3.3 (1.0)	2.9 (1.2)	3.9 (1.0)	2.9 (0.9)	4	5	2	2

52. 誰でも外国語が話せるようになる。

表 4 から、4 月時点の JSL は「大人より子供のほうが外国語を学ぶのは簡単だ」と強く感じており、「誰でも外国語が話せるようになる」という楽観的な見方はやや中間的である。「外国語を学ぶ特別な能力を持っている人がいる」、「女性は男性より外国語を学ぶのが得意だ」、「ある外国語を習得している人にとっては、新たに別の外国語を学ぶことはより簡単だ」、「数学や科学が得意な人は外国語を学ぶのは得意ではない」のような性別や年齢、学習経験の有無、能力による習得状況の違いに関しては中間的な評定である。ちなみに、「女性は男性より外国語を学ぶのが得意だ」について性別でみると、肯定が女性 9 名中 4 名、男性 9 名中 5 名で、特に性別によるかたよりはみられない。つぎに、自分自身の素質について、肯定しているのは 3 名のみで中間が 4 名、11 名が自分自身には外国語を学ぶ素質がないと感じている。また、自分を含めた母語話者の集合体としての外国語学習の能力に関するという項目でも中間的である。また、「二つ以上の言語を話す人はとても知的だ」は中間的であり、外国語学習を教養や知性と関わるものにとらえず、コミュニケーションの道具として位置付けているようである。韓国語母語話者と中国語母語話者間には、いずれの項目においても有意な差は見られなかった。

変化については、クラス全体では項目 52「誰でも外国語が話せるようになる」が有意傾向で肯定へ移行している。他の項目については有意な変化はみられなかった。韓国語母語話者と中国語母語話者では、項目 2 で中国語母語

表 3

母語別 項目	クラス全体		B1・B2	韓国語母語話者		中国語母語話者		X 母語話者		Y 母語話者	
	B1	B2	有意差	B1	B2	B1	B2	B1	B2	B1	B2
7	2.1 (0.7)	2.3 (0.8)	ns	2.4 (0.9)	2.5 (0.9)	2.0 (0)	2.3 (0.5)	1	1	2	3
5	2.2 (0.9)	2.8 (1.0)	$p < .10^+$	2.4 (1.4)	2.6 (0.9)	2.1 (0.4)	2.9 (1.1)	2	4	2	3
28	3.1 (1.2)	2.6 (1.0)	ns	3.1 (1.5)	2.9 (1.2)	2.6 (0.5)	2.4 (0.9)	5	3	5	2
10	3.2 (1.0)	2.9 (1.0)	ns	2.6 (1.1)	2.9 (1.1)	3.6 (0.9)	3.1 (1.1)	4	2	3	3

時間外国語を勉強したらその人はどれぐらいでその外国語がはなせるようになるか」は中間的である。項目 10 では、韓国語母語話者の方が中国語母語話者の評定結果より有意傾向でやや肯定に近い数値であったが、他の項目での差は検出されなかった。

変化については、クラス全体では項目 5 で否定への移行の有意傾向がみられ、特に中国語母語話者の変化に有意傾向がみられた。これについては、項目 7, 28 に有意な変化は見られなかったものの、やや中間へ移行していることと合わせて推測すると、言語学習で学びやすい言語とか学びにくい言語というものはないというやや楽観的な考えに移行している可能性が考えられる。

以上の結果から、日本語は難しい、言語学習は難しいというビリーフスは保持しつつも、言語学習に対してやや楽観的な見方が芽生えつつあると読み取れる。

4.3 言語学習に対する適性

この領域は、日本語学習を含む外国語の学習の一般的適性、および自分の適性に関して、性別、能力、分野などの観点からみた 9 項目の質問からなる。

1. 大人より子供のほうが外国語を学ぶのは簡単だ。
2. 外国語を学ぶ特別な能力を持っている人がいる。
14. 私の国の人は外国語を学ぶのが得意だ。
21. ある外国語を習得している人にとっては、新たに別の外国語を学ぶことはより簡単だ。
23. 数学や科学が得意な人は外国語を学ぶのは得意ではない。
29. 私は外国語を学ぶ素質（特別な能力）がある。
32. 女性は男性より外国語を学ぶのが得意だ。
47. 二つ以上の言語を話す人はとても知的だ。

表 2

母語別 項目	クラス全体		B1・B2	韓国語母語話者		中国語母語話者		X 語母語話者		Y 語母語話者	
	B1	B2	有意差	B1	B2	B1	B2	B1	B2	B1	B2
48	1.3 (0.5)	1.4 (0.5)	ns	1.4 (0.5)	1.5 (0.5)	1.3 (0.4)	1.4 (0.5)	1	1	1	1
39	1.8 (0.5)	1.9 (0.7)	ns	2.1 (0.4)	1.9 (0.6)	1.8 (0.4)	2.3 (0.7)	1	1	1	1
45	2.0 (0.8)	2.3 (0.9)	ns	2.3 (0.7)	2.9 (1.0)	2.0 (0.9)	2.0 (0.5)	1	1	1	1
50	2.0 (0.6)	2.2 (0.6)	ns	2.3 (0.5)	2.4 (0.5)	1.9 (0.6)	2.2 (0.6)	1	1	2	2
34	2.8 (0.9)	3.0 (0.8)	ns	3.1 (0.6)	2.9 (0.8)	2.4 (0.9)	3.1 (0.8)	2	4	4	2

に裏打ちされていると解釈できる。さらに「日本人の友達がほしい」⁴⁾という願望もやや強く、経済的な面だけでなく人的な交流も学習の動機にあると考えられる。母語別にみると、項目 34 と 39 の B1 で中国語母語話者の方が韓国語母語話者より有意傾向で肯定傾向がみられたが、他の項目では有意差は検出されなかった。

変化について、クラス全体でも韓国語母語話者、中国語母語話者のいずれにも有意な変化は検出されなかった。

以上のことから、言語学習の動機に関する JSL のビリーフスは入学後も変化していないととらえてよいと考える。

4.2 言語学習の難易度

この領域は、言語学習一般と目標言語の学習について、難しいと感じているか否かを明らかにすることを目的とした質問 4 項目からなる。

5. 言語には学びやすい言語とそうでない言語がある。
7. 日本語は (1=とても難しい 2=難しい 3=難しくもやさしくもない 4=やさしい 5=とてもやさしい)。
10. 私は日本語が上手にはなせるようになるとおもう。
28. ある人が 1 日 1 時間外国語を勉強したら、その人はどれぐらいでその外国語がはなせるようになるか。(1=1 年未満 2=1~2 年 3=3~5 年 4=5~10 年 5=1 日 1 時間でははなせるようにならない)

表 3 から、4 月時点の JSL は目標言語である「日本語は難しい言語である」、「言語には学びやすい言語とそうでない言語がある」をやや肯定している。「私は日本語が上手にはなせるようになるとおもう」と、「ある人が 1 日 1

回答数：平成12年度のJSLは28名であるが、本稿ではB1・B2両方に回答した18名の結果を考察の対象とする。JSL18名の内訳は表1のとおりである。

4. 調査結果と考察

本調査はクラス全体のビリーフスの傾向をとらえることが目的であるが、クラスは圧倒的に韓国語母語話者と中国語母語話者が多く、両者のビリーフスに違いがある可能性もある。そこで、母語別を基礎的データとして表に示し、まずクラス全体から考察をおこない、ついで韓国語母語話者と中国語母語話者の評定結果の有意差について t 検定を利用し、その結果を付け加えることにする³⁾。各領域ごとにまとめた表の数値は第1回BALLI調査(B1)と第2回BALLI調査(B2)の母語別平均値である。ベトナム語母語話者とタガログ語母語話者は各1名ずつであるため数値は評定の実数であり、ここでは数値による考察の対象からは外し、参考までにとりあげるにとどめる(X母語話者、Y母語話者とする)。表のnsは「有意差無し」を表し、()内は標準偏差である。数値の判定は、評定平均値の1から2を「賛成・肯定」、5から4を「反対・否定」、残りは中間的として考察を進める。

4.1 言語学習の動機

この領域は、目標言語学習の動機を明らかにすることを目的とした質問5項目からなる。

- 34. 私の国の人は日本語が話せることを重要だと思っている。
- 39. 私は日本語を勉強したい。そうすればもっと日本人をよく知ることができると思う。
- 45. 日本語が上手になったら、よい職業につけるチャンスがある。
- 48. 私は日本語が上手になりたい。
- 50. 私は日本人の友達がほしい。

表2から、4月時点のJSLのビリーフスは、「私の国の人は日本語が話せることを重要だと思っている」と感じているわけではないが、「わたしは日本語が上手になりたい」、「わたしは日本語を勉強したい。そうすればもっと日本人を知ることができる」という強い願望を持ち、その願望は「日本語が上手になったら、よい職業につけるチャンスがある」という明確かつ強い学習動機

3. 本稿の課題と調査方法

3.1 課題

本稿の課題は三つある。一つは、本学の JSL は入学時にどのようなビリーフスを持っていたのか、その実態をクラス全体と学習者の母語別（韓国語母語話者・中国語母語話者）にとらえることである。一つは、日本語や専門科目等の授業を受けた後のビリーフスに変化が見られるか否か、また変化があるとすればいかなる変化が生じたのかを、クラス全体と母語別に調べることである。また一つは、ビリーフスの調査結果を参考にしてカリキュラム改善のための試案を作成することである。

3.2 調査方法

本稿でも BALLI を学習者個人およびクラス全体のビリーフスの傾向を教師が把握するための道具として位置づける。調査項目の領域数と項目数については、日本語学習の他に専門科目や総合科目など日本人と一緒に受ける授業でのビリーフスの情報も得られるよう、BALLI の 5 領域 34 項目のうち 33 項目を日本語に翻訳した質問項目²⁾に、授業一般におけるストラテジーに関する質問項目「授業理解のストラテジー」と「教師への要求、依存」の 2 領域を加え、計 7 領域 56 項目の調査表を作成した。調査表の質問項目は領域をまとめず、分散させた。調査表の回答は記名式で、BALLI 同様、1＝強くそう思う、2＝そう思う、3＝どちらともいえない、4＝あまりそう思わない、5＝全然そう思わない、の 5 段階評定リカート尺度による方法を用いた。

調査時期：入学時の JSL のビリーフスを知るために 2000 年度 4 月 19 日日本語 IV の授業終了後、1 年次を対象に BALLI アンケート（以後 B1）を文書回答形式でおこなった。ついで、ビリーフスの変容を調べるために、日本語 II の前期最後の授業後（7 月 25 日）に同一の BALLI アンケート（以後 B2）を B1 同様おこなった。

表 1

	女性	男性	平均年齢	1 級合格者
中国語母語話者	6 名	2 名	25 歳	
韓国語母語話者	2 名	6 名	28 歳	3 名
ベトナム語母語話者	0 名	1 名	23 歳	1 名
タガログ語母語話者	1 名	0 名	29 歳	
計	9 名	9 名		

様なビリーフが存在している実態を報告し、教師側に教室活動における注意を促している。また、板井によれば、Wenden (1987) の報告で、学習成績とビリーフの間には関係があることが示され、学習者のビリーフをよりよいものに変化させるガイドラインが提起されたという。学習者のビリーフに関する先行研究については Mori (1999) に詳しくまとめられているのでここではこれ以上ふれず、本稿では JSL と同じ母語話者を対象に調査をおこなった板井 (2000) の中国語母語話者 JFL (Japanese as Foreign Language) の報告、岡崎・堀 (2000) の韓国語母語話者 JFL の報告の先行研究の調査報告を簡単に紹介する。

板井 (2000) は香港の 4 大学で日本語を専攻する中国人学習者を対象に調査をおこなった。その結果、①ビリーフの可変性についての考察では、学年別に差がやや出た。②ビリーフの傾向では、中国の JFL には「文法の学習」「語彙や文型の反復・暗記学習」「母語による文法説明」「教師中心の授業」というビリーフが根強い。③教師（日本人教師と中国人教師）と学習者間のビリーフのずれでは、学習者の方が教師より重視している項目、教師が学習者より重視している項目、日本人教師が中国人教師より重視している項目があげられ、ビリーフのずれがみられた、ことを報告している。他方岡崎・堀 (2000) は、韓国の大学で日本語を専攻する韓国人学習者を対象に、コース開始前とコース終了時点の 2 回にわけて①ビリーフの変化、②学習成績とビリーフの関係、③ビリーフは学習成績を予測できるかについての 3 点を明らかにする調査を行った。その結果、①については 34 項目中 4 項目についての変化がみられたこと、②については日本語学習の成績の 3 割の予測が可能であったこと、その結果③についてはビリーフは学習成績を予測する物差しとして使えると結語している⁽¹⁾。

このように、現在のビリーフ研究は、BALLI を道具として駆使し、学習者のビリーフの実態、可変性、学習成績の予測、教師と学習者間のずれなどを母語別に明らかにする作業の途上といえよう。なお、各調査における BALLI の質問領域や項目数、質問内容は固定したものではなく、BALLI をベースにしながら、各調査者の目的に合わせて削除・添加している。岡崎・堀 (2000) は Horwitz の 5 領域 34 項目と同じであるが、板井 (2000) は 4 領域 47 項である。

スを押し付けた場合、学習者は不満を感じるだけでなく、学習効果にもマイナスの影響を及ぼすであろうことは想像に難くない。

そこで、複数の文化が同一環境に集まる本学科の日本語の授業のカリキュラム・デザインを新たに作成するために、まず JSL の 4 月入学時のビリーフスの実態把握をおこない、ついで、日本語の授業 I~IV や他の授業の受講後にビリーフスに何らかの変化が起きているか否かに関する動態的調査をおこなうことにした。

本稿では、上の考えに基づき 2000 年 4 月と 7 月におこなった JSL のビリーフス調査の結果を報告する。本稿を展開するにあたっては次の手順をとる。2 でビリーフスの調査報告の概観と調査表 (BALLI) の内容を紹介し、3 で本稿の課題と調査方法、4 で JSL のビリーフス調査の結果報告と考察をおこない、5 でまとめと今後のカリキュラム・デザインについて考える。

2. ビリーフス研究と BALLI について

言語学習における学習者のビリーフス研究は、教師が中心としておこなう授業形態の研究から学習者自身の認知レベルにおけるストラテジー研究への転換にともなって始まった。目標言語の学習で成功した学習者とそうでない学習者の違いが何に起因するのかを明らかにしようとする研究を皮切りに、それらの違いを言語学習における学習者のストラテジーとのかかわりから分析しようとする研究が始まり、こうした流れの中で Horwitz (1983) が開発した BALLI (Beliefs About Language Learning Inventories) を使った調査研究が発展した。

Horwitz の BALLI は、「言語学習に対する適性」「言語学習の難易度」「言語学習の性質」「コミュニケーション・ストラテジー」「言語学習の動機」の 5 領域 34 項目からなる調査表である。Horwitz (1987) は、BALLI を使っておこなった成人学習者 (ESL) の調査の結果、学習者のビリーフスと学習活動の取り組み方やストラテジーに関係があること、さらにビリーフスの分類と体系化を通して、学習者のビリーフスは変化させやすいこと、したがって言語学習の阻害要因を取り除けばクラスの学習を促進できるのではないかと、また、教師のビリーフスを調べることによって学習者のビリーフスとのずれがあきらかになると述べている。さらに、Horwitz (1988) はことなる目標言語 (ドイツ語、フランス語、スペイン語) を学習する大学生初級レベルのビリーフスを比較したが、コミュニケーション・ストラテジーの領域で一貫性のない多

中・上級日本語学習者の日本語学習に 関する確信(ビリーフス)

—カリキュラムの作成にむけて—

渡 邊 亜 子

1. はじめに

本学科では従来より外国人学生（以後 JSL: Japanese as Foreign Language）のカリキュラムを特別に設け、総合科目、専門科目等の授業を理解できるよう、日本語運用能力の向上を目指した通年の日本語の授業 I（作文）、II（聴解）、計 3 時間を 1 年次、III（読解）1.5 時間を 2 年次の必修科目としておいてきたが、平成 12 年度から、学習者の増加にともないあらたに日本語 IV（日本事情）を加えると同時に、一年次に 4 コマ（6 時間）すべてを履修するカリキュラムに変更した。このカリキュラムは、1 年次に集中的に日本語を学習し、日本語能力の向上を促進させることを目的としたものであるが、授業時間数の増加は JSL が希望する専門科目等の授業を履修することができなくなるという新たな事態をもたらした。このため、限られた時間内で JSL のニーズ「日本語運用能力の向上と日本文化に関する知識の獲得をはかりたい」に答えられるようなカリキュラム・デザインの作成が急務となった。

カリキュラムをデザインするにあたっては、どのような教授法、教室活動、教材を選択するかの決定が必要であり、そのためには個々の学習者の学習行動の背景に内在する心的態度や、学習者が望んでいる教室活動の内容について知らなければならない。JSL は平均年齢 26.5 の成人であり、さまざまな学習活動を通して知らず知らず言語学習はじめ一般の学習のストラテジーを身につけ、自分の経験から得た学習へのアプローチの仕方や確信、つまりビリーフスを身につけていると考えられる。しかも、Horwitz (1988: 283) が指摘するように、そのビリーフスは JSL が身につけている文化と緊密にかかわっている可能性があり、複数の文化が集まる教室では日本人教師のビリーフスとは異なるさまざまなビリーフスの集合が予測される。もし、日本人教師が JSL のビリーフスを知らずに、教室活動の際に一方向的に自分のビリーフ